

人民戦争と「被抑圧人民」

谷川昌幸

1. 心情的マオイスト支持の広がり

マオイストの人民戦争の犠牲者は、昨年11月26日の非常事態宣言から3月末までの4ヶ月間で1722人だという(朝日2002.4.11)。それ以前に、ほぼ同数の犠牲者が出ているので、3月末時点ですでに3千数百人。これは大変な事態だ。

事態が切迫していることは、カトマンズでもひしひしと感じることが出来る。この3月20~30日、カトマンズに滞在したが、市内要所には、軍が土嚢を積み防御陣地を築いていた。土嚢の上には軽機関銃が据えられ、人が歩くと銃口が丁度顔付近に来る。幾度かそのような場所を通ったが、いつも気味が悪かった。また、日没後は、銃を構えたパトロール兵の検問も少なくなかった。

しかし、これほど厳しく軍や警察が警戒しているのだが、マオイストの活動はカトマンズ市内でもしばしば見られた。たとえば3月29日、ピシュヌマティ川の橋の欄干に仕掛けられていた爆弾が爆発し、20数名けが人が出た。この橋は私自身よく利用している。そこが真っ昼間に爆破されたのだから、恐ろしい。

一方、経済的にもマオイストの圧力は、日常化しているようだ。私学関係者によれば、マオイスト青年が定期的に学校を訪れ、数万ルピーの寄付を要求する。断り切れないので、減額してもらって払わざるをえないそうだ。

マオイスト影響下の地方はもっとひどい。滞在中にも、西部出身のある人が、村に残してきた妻と子供をマオイストに連れ去られ、家財を全部没収された。数日後、妻と子供はジャングルで発見されたが、財産は既になくなってしまったので、結局、妻と子供はカトマンズにつれてこざるをえなかった。

このように、マオイストは中流・上流階級にとっては大きな脅威だが、直接攻撃されている人を除けば、彼らのことを頭から悪くいう人は案外少なかった。悪いのは失業、貧困、差別だ、こんな状態では自分だっていつマオイストになるか分からない、と平気という人さえ何人かいた。

マオイストが残忍非道なワル、ならず者のテロリストなら、話は簡単だが、実際はそうではない。少なくとも何人かから話を聞いた限りでは、心情的マオイスト支持は相当広まっている。数値化は出来ないが、雰囲気として、それは分かる。そうでなければ、これほど大規模な人民戦争を長期にわたって続けられるはず

がない。マオイスト問題の解決が難しい大きな原因の一つが、ここにある。

では、どのような人がマオイストになるのだろうか。

2. 「被抑圧人民」の人民戦争

マオイストについては、まだよく分からないことが多いが、ショバ・ゴータムを中心とする女性ジャーナリスト・グループの調査報告(文献)を読むと、人民戦争の実態をある程度窺い知ることができ、興味深い。

(1) マオイスト運動の2つの中心地

調査報告によれば、マオイスト運動の中心地の一つは、ゴルカだ。ゴルカでは1954/55の大飢饉のときの農民反乱をきっかけに共産主義運動が始まり、プシュパラル・シュレスタ、モハンピクラム・シンらがこれを指導した。バブラム・バッタライの出身地であり、妻のヒシラ・ヤミもゴルカで活動した。ゴルカはカトマンズに近く、国内では比較的豊かで、教育レベルも高い。

これに対し、もう一つの中心地ロルパ・ルクム・ジャジャルコットは、もっとも開発の遅れた地域であり、パンチャーヤット期から激しい反政府運動があり、モハンピクラム・シンの Masal もロルパを本拠にしていた。プラチャンダはポカラ近郊の出身であり、彼の Mashal の地盤もこの地方にあると思われる。

以上のことを図式化すれば、ゴルカでは比較的豊かで教育のある民衆をインテリ指導者バブラム・バッタライが指導し、ロルパ方面では貧しい低教育の村人をカリスマ運動家プラチャンダが率いている、ということになりそうだ。この対比は、強調しすぎでは無いが、無視は出来ないであろう。

(2) 村人はなぜマオイストになるか

では、村人たちはどのようにしてマオイストになるのだろうか。女性ジャーナリスト・グループの報告は、貧困と差別に苦しむ「被差別人民」がマオイストになる事情をかなり具体的に説明してくれる。

報告によると、西部には、ロルパのミラレ村のように、男がいない村がいくつもあるという。

1991年選挙で統一人民戦線UPFが西部で勝利すると、 कांग्रेस党政府は1994年、UPF支配地域の弾圧に乗り出し、1000人以上を逮捕、拷問し、ある場合は殺した。これに対し、マオイストが反撃すると、政府はロメオ作戦(1995.11~)で、さらに弾圧を強化した。

このように政府・警察とマオイストの対立が激しくなると、一般の村人たちも両者の対立に容赦なく巻き込まれていった。当初は、昼間は警察、夜はマオイストに従うという方便で切り抜けたが、そんな使い分けは長続きしない。警察からはマオイストとの関係を疑われ、マオイストからは警察のスパイと見られる。

結局、ロメオ作戦の結果、1～10万人もの男たちが村にいらなくなり、ファラリ（逃亡者）となって、多くは近隣のジャングルに逃れた。

こうして、村には女、子供、老人だけが残ることになった。これに対し警察は、村に残った人々とマオイストとの関係を疑い、弾圧を強めた。ジャングルに潜んでいる家族や知人が食料などを求めれば、与えざるをえない。ところが、警察はそれを理由に逮捕、拷問、虐待をするのだ。こうして女たちも安全でなくなり、ジャングルへ逃れることになった。

ジャングルに逃れた男たちは、村に残った女、子供、老人への弾圧を理由に、マオイストになり、女たちも警察への恨みからマオイストになった。

1998年からは、ロメオ作戦に続いてキロセラ作戦が行われ、その残虐性の故に、この作戦によって、さらに多くの村人がマオイストになった。

マオイストと共闘関係にあるペルーのセンデソ・ルミノソ（輝ける道）の場合と同じく、絶望的な貧困と差別があるところで、反体制ゲリラが活動を始めたら、これを力で押さえ込むことは、難しい。

(3) 被抑圧民族と女性

次にマオイストの構成についてみると、被抑圧人民の中でも特に差別されている少数民族と女性が相対的に多いことが分かる。

女性ジャーナリスト・グループの報告によれば、マオイスト支配地域ではゲリラの3分の1が女性であり、その70%がチベット・ビルマ系諸民族（マガル、タマン、グルンなど）の女性だという。

事実だとすると、まず女性の多さに驚く。（ちなみに、5月11日ダン郡のサンスクリット大学を焼討攻撃した数百人のゲリラの大半は女性だった。）

また、民族的にも、アリア系対非アリア系の民族対立の様相が濃くなる。人民戦争の非政府側犠牲者の内訳を見ると、マガルが全体の4分の1、民族判別者の約半分を占め、際立って多い。カミ、タマン、タルーもかなりいる。マガルを筆頭に、少数諸民族が人民戦争において大きな役割を担っていることは否定できない。

(4) 根拠地支配の現状

ロルパ、ルクム、ジャジャルコットなど、マオイ

トが革命根拠地として確保した地域の村では、人民政府の実効的支配がほぼ確立している。

現地調査によれば、郡人民政府はそれまでの書類をほとんど破棄し、人民政府自身が新たに徴税、福祉、公共事業、森林管理、結婚届けなど行政一般を行い、VDCの選挙や裁判も行っている。

さらに注目すべきは、マオイストが学校を支配下におき、革命思想を子供たちに注入していることだ。報告によれば、子供たちは口を揃えてこう答えたという。「警察は敵だ。警官どもは森に入った人々が切り刻んでくれるだろう。2年もすれば、私たちの政府ができるよ。」

また、まだ根拠地ではないが、教育が普及しているゴルカでも、マオイストは学校に強い影響力を持ち、教員を通して革命思想を子供に浸透させている。報告によれば、ゴルカでは10歳の少女が、こう言ったという。「マオイストは金持ちの財産を奪い貧しい人に与える。マオイストは貧しい人のために働いているので、警察に弾圧され殺されるのだ。」

教育の力は大きく、この状態が持続すれば、マオイスト運動は指導者たちの思惑を越え、過激な文化革命となって進行する可能性がある。

3. 人民戦争の行方

マオイストの正体は、なお分からない。これがもし伝統的な有力者の権力闘争の一つなら、あるところで妥協が成立して終わり、犠牲者は出ても、ネパールが体制崩壊まで突き進むことはない。

しかし、もし民族紛争なら、これは容易には収まらず、泥沼化し、内戦になる危険性が大きい。たとえば、ネワ・カーラの14箇条要求(1999年)をみると、すべての言語を国語にせよとか、カトマンズ盆地をネワ自治区にせよ、他の諸民族にもそれぞれ自治権を与えよ、等と要求している。

また、本物の毛沢東主義革命なら、40項目要求(1996年)を見ても分かる通り、体制転覆まで突き進むことになる。

マオイスト運動がどちらに向かうか、これに政府や議会諸政党がどう対応するか、注視していきたい。

(文献) Shoba Gautam, *Women and Children in the Periphery of Peoples' War*, 2001; Shoba Gautam et al., *Where There Are No Men*, in R. Manchanda ed., *Women, War and Peace in South Asia*, 2001.

[4月20日ネパール百科勉強会報告要旨]

(ネパール協会『会報』No.172、2002年5月)

